

《書評》

クラウス・マイヤー＝アービツヒ著、山内廣隆訳
『自然との和解への道 (Wege zum Frieden mit der Natur)
——環境政策のための実践的自然哲学』(上)(下)

みすず書房[※]

(※ 原著 1984年初版、邦訳2005年～06年刊行)

中 田 重 厚

著者の根本思想と現実政治への関わり

訳者の山内氏は本書のあとがきの部分で、「本書は「実践的自然哲学」の立場から、人間と自然との関係について新たな知を構築し、そこに規範原理を打立て、それを通じて「生態学的破局」の防止をめざすものである」と要約している。

これまでヨーロッパを中心とするいわゆる近代社会は、人間社会を中心に自然界がその周りをまわっていた。自然界のありとあらゆるもの(大気、地質、気候、動植物など)が人間生活のために供せられ、機能させられていた。しかし、この構造が続く限り、自然の破壊は限りなく進み、やがて地球は生態学的破局を迎えることになる。

アービツヒ氏は、今日、人々の日常生活のあらゆる領域、そして知の体系たるあらゆる学問領域——自然科学、社会科学、人文科学、哲学などがこの人間中心主義的世界観によって支配されていると見、これを自然中心主義的世界観に転換することの必要性を説くとともに、環境政策、雇用政策、交通政策などを自然中心主義的世界観(およびその下での人間観)によって変更する具体案を提示している。アービツヒ氏

は、これまでドイツの社会民主主義の政策に大きく関わってきた。巻末の著者略歴をみると、大学で自然哲学を講じた後、マックス・プランク研究所で研究活動に入っている。その後1976-82年にドイツ連邦議会「将来の核エネルギー政策」審議会、1984-87年ハンブルグ市の「科学と研究」のための大臣、1987-94年ドイツ連邦議会「大気圏保護」審議会委員などを歴任している。哲学者が国の政策提言の中心メンバーであるのは、ドイツ社会とわが国との違いを感じさせる。

アービツヒ氏がこの本の序論で、プラトンの「国家」からつぎの文を引用して論じていることからすると、哲学が国家の政策の中心を成すのが正統であるといえる。すなわちつぎの文である。「国家権力をもつ人びとが真理について問うことを学ばないかぎり、そして真理を問うことを心得ている人びとが権力者という活動条件のもとで答えを得ようと努めないかぎり、政治的悲惨さで結末を迎えるほかないであろう」と。このことから見ると、日本の国の政治はどうなっているのだろうかと考えてしまう。

アービツヒ氏が自らの環境哲学を「実践的哲学」と称するのは、訳者解説によると、これまではカントに顕著に見られるように、実践＝倫

理学と認識＝自然哲学とはまったく別の学問とされていた二元論的見方をしりぞけ、それらの統一体を要請する。すなわち彼は、「人間的なるもの」と「自然的なるもの」の統一体としての「ピュシス」を規範として哲学の根底に据えるのだという。

著者は「日本語版への序文」の最初の部分で、この本の根本思想は「人間の外にある自然は、われわれの自然的共世界（Mitwelt）である」という根本命題に集約できると言っている。私たちが日常用いている「環境（Umwelt）」という用語は、あくまでも人間（Menschen）が中心に座っていて、その他の自然（Natur）はそれに仕えるシモベであるから、人間の周り（Um）にある自然界が環境（Umwelt）（environment）ということになる。自然に対するこうした人間の態度は思い上がりでしかなく、自然界を中心に考えれば、人間世界は自然の共世界（Mitwelt）の中に住まわせてもらっている人間の共世界（Mitmenschen）ということになる。この共世界（Mitwelt）という用語はゲーテに由来するものだという。だが、この共世界という用語は、20世紀以降、日常言語の上でも哲学の用語としても（レーヴィット、ハイデッガー）、人間だけの世界に狭めることになってしまったと著者は説明している。

なお、著者の考えに最も近い思想家はスピノザ、シェリング、ゲーテであると訳者は解説している。

私の「生活文化論」の講義から

さて私は、2006年度に新設されたカリキュラムで「生活文化論」という講義を担当することになったが、その中で今日の食文化について考察した。その過程で出会った本がこのアービッチ氏の本である。

私たち一般消費者は、好むと好まざるとに関

わらず、食の工業化、グローバル化の下で、食の生産から加工、販売及び調理に至る各種のアグリビジネスにより提供される工業的文化（文明）にどっぷりとつかって生活することを余儀なくされている。しかし、消費者はそれらの便利な食材や食製品がどのような経緯を経て作られているのか詳細については知り得ていない。だが、狂牛病や鳥インフルエンザ、食中毒など様々な徴候が現われ、人々の不安をあおっている。また、遺伝子組換作物（GMO）の食品に対する人々の警戒心は、その開発が何か得体の知れないものであり、それを身体にとり込むことが危険ではないかという人々の自然の感情に根ざすものなのだろう。

近年、アメリカの食料メジャーの一つであるモンサント社が開発した“自殺する種子（suicide seeds）”というのが「タイム」誌の記事（1999年2月）に載り、話題になったという（河野和男「自殺する種子」新思索社）。これは、最先端のバイオテクノロジーを駆使して作り出した種子で、次世代には発芽しないように仕組まれたものである。この種子を開発した理由は、モンサント社と買付け契約を結んだ農民は毎年これを買ひ続けなければならない仕掛けからである。すでに当社が開発したハイブリッド種子も、次世代には同一の遺伝子が継承されない種子である。食糧メジャーは、モノカルチャー農業を推進し、一方では種子の独占により零細農家の自立を阻げると同時に、他方では、自然生態系に依存する自立農家の生産基盤そのものを破壊するのである。その結果は、地域の食文化そのものの崩壊である。

自然の固有の価値への着目と、そこからの政策提言

さて、アービッチ氏の著作は、今日の私たちの社会の閉塞状況を打開し、未来を展望するも

のであると考える。

これまで人々は、ことに産業革命以降、工業化を推し進め、人間中心主義的世界観、人間観の下にものごとを考えてきたが、自然のもつ“自然性”(自然そのものの固有の価値)ばかりか人間そのものの“自然性”という視点を欠落してきたのではなかったか。その点では、子どものもつ“自然性”に着目したルソーの「エミール」における考察は秀逸であると思う。では、人間中心主義的世界観から自然や人間を考えるのと自然中心主義的世界観から人間を考えるのとではどのような違いがあるのか。前者の世界観では、せいぜい自然や人間の〈使用価値(use value)〉という面しか浮かび上がってこないが、後者の世界観からすると、自然や人間の〈固有価値(ラスキンの用語によれば intrinsic value)〉に着目するのである。すなわち、それぞれの自然、人間、地域のもつ特性(Besonderheit)に着目する。〈使用価値〉は、あくまでも自然物の商品価値の一側面でしかなく、交換価値に媒介された経済的価値でしかないのであるから、そのものの固有の価値とは異なる。ただし、アービッチの本にはそこまでの言及はないが、4章の2節で、人間中心主義的世界観の下では、自然と同じく人間までもが経済過程の資源ないし原料として取り扱われていると言ひ、その証拠としてサムエルソンが彼の経済学教本の中で、「天然資源」と並べて「人的資源」という用語を用いていることをあげている。

では、アービッチ氏は、このような自然中心主義的世界観・人間観にもとづいて現実の政治をどのように具体的に考えているのか。彼は、“自然との和解”が政治目標になったと言っている。そして生活の全領域にわたる思惟の変更が必要だと言ひ、具体的な政策提言を行っている。例えば、雇用政策については、労働が必要

とされるところに(人々の生活の必要性にもとづいて)仕事場が生まれ、人々がその生活費を得るために生活上の基礎を犠牲にしてのみ手に入れうる仕事場がそれと取り替えられるような雇用政策を推奨する。また農業政策については、農業や林業が耕地ばかりでなく、動物的共世界と植物的共世界をも手入れし、保存しうるような農業政策を推奨する。その他交通政策、科学・技術政策、文教政策、保健政策、財政・金融政策についても自然的な共世界との関係の和解にもとづく政策提言が行われるのである。

アービッチ氏の「近代テクノロジー」観への疑問

最後に、本書に対して一つの疑問を呈したい。それは、著者の近代テクノロジーに対する観点、評価に関する疑問である。

本書の11章(自然的共世界の理解)の個所で、著者は将来の技術として自然系技術、非暴力的技術を推奨している。現代の生活は、一人の人間が身体を維持するために必要な物理的エネルギーの100倍ものエネルギーを使う生活となっている。そのため、これからの技術開発は地球に負担をかけない省エネ型の技術が開発されることが望ましい。そのような技術として著者はバイオテクノロジーやマイクロエレクトロニクスを推奨するのであるが、これはあまりにも自然科学的な見方に片寄りすぎてはいないか。先の食のグローバル化のところでもみたように、生産関係の視点、社会科学的視点に裏付けられないと近代テクノロジーに対する正当な評価も鈍ってしまう。ガンジーは、どのような技術が望ましいかと問われて、“巨大資本や権力者の利益に結びつくような技術は排除されるべきだが、多くの民衆の生活に役立つ技術は推奨されるべき”だと答えたという(シューマッハー「スモール・イズ・ビューティフル」)がこのガンジ

一の回答の方が単純明解であり、よりのを得たものであると考える。

アービッチは、19世紀以来の地球規模のすさまじい環境破壊は、環境を破壊する資本側と本来なら環境を保護する労働側とが、「資本と労働との非神聖同盟により、“自然との和解”を犠牲にして進められたというのである。そして、その後歴史に登場した社会主義諸国も、資本主義の下で発達した工業生産力をそのまま取り込んだが故に、工業化による生態系破壊から免れることはできなかつたし、むしろ、その共犯者になってしまったというのである。

そこで、この工業化社会の弊害を乗り越えるためには、人々が、富の実現による物質的生活の充足という価値目標からより高い生活の質への願望——すなわち、政治や経済への諸決定への人々の参加、都市や地方の美しさ、あらゆる領域におけるより大きな精神的開放など大衆の生きる目標に向けての価値の転換が必要だと著者は言う。そして、こうした将来社会のヴィジョンとして、工業経済的秩序を再び自然秩序とのよりよき強調に連れ戻した経済スタイルである「社会福祉的市場経済」を提唱する。

だが、本書を読み進めるうち、どこか論が現実と噛み合っていないもどかしさを感じる。そして、その原因はどうやら著者の観点そのものにあるように思えるのである。

すなわち、本著では、自然をないがしろにする工業化と技術革新を推進する主体が“人間一般”に置かれており、個々の技術開発がいかなる目的でなされているのかという肝心なところがすっぽりと抜け落ちてしまっていると思われる。

例えば、このことを生物工学の近年の例で見ると、1996年にアメリカのモンサント社は遺伝子組み換え綿（GMO）の開発を行った。

この遺伝子組み換え綿は、綿の害虫ボルウォーム（オオタバコガ）に対して毒性のあるタンパク質を生産する土壌細菌（Bt）のDNAを組み込んだ綿の品種である。モンサント社は、これを特殊の種子とし、特許権を取り、栽培契約農民にはこの種子を一世代使うことを許可するが、二世代以降は、使用はおろか、保存、売買をも禁じている（バンダナ・シバ「バイオ・バイラシー」緑風出版（原著1997年刊））。

以上の事例からすると、モンサント社は、バイオ・テクノロジーの開発により、GMOの種子を独占し、国内、国外の農民に売り付けこれにより巨大な利益を上げる多国籍企業（スーザン・ジョージの用語によれば、超国家（trans-national）企業）である。国内外の契約農民は、その種子を穀物メジャーたるモンサント社から毎年買い続け、当社の技術指導を受けなければならないことになる。つまり、このことによって、かつての自営農民は、長年自然との対応の中で続けてきた自然交配による種の保存という独自の技能と知識を放棄させられてしまうのである。また、アグリビジネスの大中小さまざまな企業は、超国家企業の主導の下で、垂直的・水平的構造の中での業務の一端を受け持っている。つまり、工業化を推進し、技術開発を進める主体は、形式上は同格であっても、実質上は同格たりえないのである。アービッチの論には、こうしたグローバルプレーヤー主導の下での技術開発、経済的・政治的支配＝従属関係という階級的視点が欠落しているように思える。

工業化社会の下での人間の知覚〔理解〕能力の減退

だが、アービッチの論文の主眼点は、以上の点にはなく、工業文明の下で人間の自然性が徐々に喪失していくことの危機への認識という点にあるように思う。この点については、本書の11

章の「自然的共世界の理解」の個所で考察されている。

ここでは、人間の知覚〔理解〕能力が問題にされる。彼は生態学の創始者のヤコブ・フォン・ユクスキュルの考えにもとづいて論を展開していく。まず、生物の共世界とは、ある動植物の感覚世界のことであると著者は言っている。ネズミの世界には、ネズミだけが感じとる感覚世界（視覚、嗅覚、味覚など）が存在するし、トンボについても同様のことが言える。人間の知覚〔理解〕能力についても他の生物と同様であるが、今日の人間は、工業社会の中で周囲の自然との能動的なつながりを失うことによって、知覚能力そのものが退廃していってしまう。工業社会的に生活している人間の環境（Milieu）からは植物や動物の共世界は消え失せてしまう。わが国でも、このような徴候に気づきそのことを指摘した本が1989年に出版された（寺内定夫著「感性があぶない」毎日新聞社）。そこでは、保育園の園児の感覚能力の減退の事例とその背景について考察されている。

さて、著者は、農業の工業化のなかで行われた、化学除草剤に耐性をもつ有用植物の品種改

良は、耐性をもたない他の野生植物を枯らしてしまうが、これは、化学工業がもつ一定様式の欲求に人間自身が適応させられることであると言ひ、こうした誤った発展への適応から脱却し、人間本来の自然性を回復させる道は、新しい化学除草剤によって失われてしまいそうな野の植物をしっかりと支えることだと言っている。つまり、消失の危機にさらされている野の植物の身になって考えることによって人は自然と自らの中の自然とを同一視することが可能になると言うのである。

本書を読んで著者のテクノロジー観には疑問が残るものの、今日の工業社会をどう克服していくかについての重要なパースペクティヴを示してくれた。“自然的共世界”というもう一つの視角から世界を見ると、これまで見えなかったもう一つの世界が見えてくるのである。

本著は、人間とは自然そのものであり、今日の環境危機は人間そのものの危機にほかならないことに気づかせてくれた価値ある一冊である（2007.1.31執筆）。

（なかた しげあつ、本学科教授）